

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



しろのらくいん
白の烙印

小説 綾守竜樹

挿絵 柴刃俊郎



序章

第一章 帝都の女騎士

第二章 城塞の女司祭

第三章 淫獄の五姫星——聖母の愛娘

第四章 淫獄の五姫星——双頭の大賢者

第五章 城塞の女騎士

008

017

063

115

167

217



登場人物紹介

Characters



アリス

本名アリスフェルト＝マールブルク。元は半自由民の農民。女帝に憧れて騎士になろうと決意する。聖鏡騎士団員に叙任され、初任務に赴く。

ヒルダ

本名ヒルデガルデ＝ファナ＝ヴァーンスタイン。ファース教会祓魔省所属の女司祭。男尊女卑的な貴族社会が嫌で、リーヴス尼僧院に逃げこむ。覚醒の祈りに非凡な才を示す。かなり気位が高く、何かにつけて周囲を見下しがち。



エフィ

本名エフェミア＝アンスヴァール。熱烈な信仰心ゆえ5歳にして誓願、アーガス尼僧院に入る。強力な覚醒と癒しの力を授かり、「聖母の愛娘」と讃えられる。大悪魔退治のためにアデル軍に合流し、後に「夜明けの五姫星」と呼ばれるようになる。大悪魔とアーガス迷宮で戦い、英雄的な最期を迎えたとされる。



ノイン

本名ノイベルローゼ＝ファナ＝オーベルザルト、またの名を「双頭の大賢者」。10代半ばで著書を出した天才魔術師。長らく自城に閉じこもって過ごしていたが、アデルに請われて征伐軍に参加。魔術師ならびに軍師として辣腕を振るい、「夜明けの五姫星」の1人に数えられる。アーガスにて戦死。

ルーティエ

本名は発音不可能。嫉妬を司る大悪魔「果てしなき自虐」と人間の女とのあいだに生まれた半魔族。すでに500年以上生きており、「永劫の傍観者」と呼ばれていた。アデルらと戦って敗れた後、征伐軍の仲間入り。魔族としての特殊能力を振るって、「夜明けの五姫星」の1人になる。アーガスにて戦死。



シュナイダー

本名不詳。大剣を振るう女傭兵として名を馳せ、その赤髪から「炎の千人斬り」と呼ばれた。アデルら指導部といさかいを起こしながらも指揮官に昇りつめ、後に「夜明けの五姫星」の1人に数えられる。アーガス迷宮の戦いで英雄的な最期を迎えたとされている。

アーデルハイド

本名は、アーデルハイド＝ファナ＝グラスベルガー。大悪魔の征伐軍を指揮し、「夜明けの五姫星」の代表として国家的な英雄になる。アーガスの迷宮戦で唯一人だけ帰還、帝都に凱旋する。万民に支持されて、帝国初の女帝として即位する。



インキュヴァーリン 淫夢の女王

大悪魔「破戒せる情欲」が休眠前に生んだ悪魔三体の1つ。淫らの情念を受肉させた悪魔。休眠時は少女の姿、覚醒時には上半身は妙齢の美女で下半身は大蛇という化け物姿。特定の生け贄に固執し、相手に徹底的に依存したがる。

ニコライムス 姦淫聖職者

大悪魔「破戒せる情欲」が休眠前に生んだ悪魔三体の1つ。淫らの教義を受肉させた悪魔。休眠時は老聖職者の姿、覚醒時には骸骨と影の化け物姿。あらゆる対象に淫欲を植えつけて、その自律的な稼働を促す。



ブロッケンフリューデ 破戒せる情欲

ファース聖教が貞潔を強調しすぎたがゆえに生まれた大悪魔。聖書の記述から、おそらくは最後の罪であろうと言われている。あらゆる人間に淫夢を見せて魔族化させ、聖教圏を存亡の危機に陥らせる。アデルらの征伐軍により、アーガス迷宮の底で眠りに就かされる。

堅牢強固だつたはずの信仰に、ヒビが入つた。

狡猾な調教者は、もちろん、その決定的な弱点を見逃さなかつた。

ルーティエはそれ以降、他のいかなるところを責めるときも尻責めを併用してきたのだ。まずは、聖母の門扉。前と後ろの穴を交互に突かれて、尻穴からほとぼしる狂気を聖母にも感染させられた。二つの穴を隔てる肉の壁は、背徳の悦びを遮断するにはあまりにも薄かつたのだ。エフィが前の穴でも信仰を見失うようになるまで、それほど時間はかからなかつた。

次は、罪の根。こちらは前後の穴を一時に責められた。肛姦だけでも陥落させられてしまふエフィが、魔性の三重奏に耐えられるはずもなかつた。その次は胸。このときは四重奏になり、さらには口――。

聖母の愛娘だつた女はこうして、ありとあらゆる場所を覚醒めさせられたのである。

一度転げおちてしまえば、もはや後戻りは利かなかつた。どれだけ抗つたとしても、ただ墮ちる速さを変えられるだけで、墮落それ自体は予定説だつた。エフィの女体には尻穴の悦びを頂点にした官能の階層制が灼きつけられ、元々の住人であつた信仰心をじわじわと追いたててきた。魂の主座から引きずりおろし、異端に追いやり、なお飽きたらずに責めさいなんで、影も残らぬよう滅ぼそうとしてきた。

それは、絶望的な消耗戦だつた。

腋のしたを舐られただけでも達するようになされてしまったとき——エフィの信仰心は、ついに弱音を吐いた。百本の触手に休みなく肛姦を続けられ、肛門の筋肉を一時的に伸びきらされてしまったとき——それは断末魔をあげた。内臓に逆流してくるほど精液を注ぎこまれ、腸の中身と一緒に嘔きださせられてしまったとき——それは神を忘れた。ルーテイエの執拗な強制に屈して、「イク」と隷属の証を叫んでしまったとき。

それは、神を怨み始めた。

「ひいっ……い、イク……」

どんなに祈っても、どんなに信じても絶頂を極めさせられる。

悪魔を喚びだす穴は、鮮やかで、生々しくて、そして奥深い悦びをほとばしらせてくる。全身を震わせ、奥歯をがちがちと鳴らして余韻を吐きだしながら、女司祭は生まれて初めて、心のなかに懷疑を宿した。

神が真に全知全能であらせられるのなら、どうしてこの穴に棲みついた悪魔の好き勝手をお許しになれるのだろうか？ こんなにも力強くて、こんなにも恐ろしい悪魔に勝てる信仰者が、はたして居るのだろうか？

どうして。

どうして、肛姦はこんなにも気持ちよいのだろうか？

「うふふ……誰の、どこがイクのかしら？」

「ひああつ、え、エフィっ！ エフィのお尻が……ッ！」

もちろん、正気に戻ると後悔に襲われる。

神を疑い、さらには謗りかけた自分の罪深さに涙させられる。

しかし、懺悔の時間は与えられない。すぐに肛姦が再開され、破戒せる情欲に魂を搾りとられてしまう。前よりもいっそう感度を高めた肛門が、絶望的な快感を送りだしてきて、すべて忘れてしまえと囁きかけてくる。

さらには、ルーティエも甘言を滴らせてくる。

ここは悪魔の獄、淫らの王国。

ここでは誰だろうと、どんな人間だろうと関係ない。ただ黙って、淫らな夢に溺れればいい。神も信仰も忘れて、牝の解放感にうち震えていればいい——。

※

エフィは首を振って、際限なく続いてしまいそうな回想を捻じきった。汗だらけの肩で呼吸し、折りたたまれている肘と垂れ気味の双乳とを、大きく振幅させた。

「……もう……もう、お……おやめなさい……ル……ルーティン、ライド……」

弱り、乱れていてもなお、穏やかさと柔らかさを失わぬ声。かつて何万人という信者を魅了し、改心させ、教導し続けた美声を、ふつくらとした唇から途切れ途切れに漏らす。

「へえ……さっきまであんなに痴れ狂っていたのに、もう醒めたわけ？ さすがは聖母の

愛娘様。私らを騙して、あいつを脱走させただけではあるわね……エセ坊主のつまみ食いなんて眺めてないで、もつと深い淫夢に墮としてあげればよかったわ」

「……ゆ、夢は……いつか……醒めるものです」

女司祭の柔らかな目尻に、凜とした緊張が戻った。ほつれ毛を噛みながら首を振って、「どれだけ、この身を汚されても……どんなに、おぞましき夢に沈められても……か、神への信仰までは消せません……信仰を持つかぎり……神の光は、いつでも夜明けの……覚醒を導いてくれます……」

そのはずだ。

そのはずなのだ。

「へえ、便利な松明たいまつなのね……でもねエフィ、夢から醒めたのなら、また夢を見せればいいのよ。気持ちよくてたまらない夢……聖女のなかの聖女と言われたあなたでさえ、我を忘れて溺れてしまう淫夢を……何度でも見せればいいのよ」

肉の壁が粘っこい音を立てながら蠢き、無数の肉管を伸ばしてきた。ある管は泥人形じみた腕に、ある管は目と歯のない蛇になり、尼僧の生白い裸体に群がり、我先にまとわりついてきた。

「ひ……んっ、んあ……あひっ」

臓物の腕が、囚われた女の後れ毛を梳きすかず。鱗のない蛇が、耳たぶを甘噛みする。

震える首筋に粘液を塗りたくる。露わな腋窩を撫であげる。

「あなたたちにとって、最大の敵は時間なのよ。時間は、生けるものにとって最強の暴君よ。誰もその支配には抗えない……」

実感の込められた独白だった。

「……そのうち、信仰とやらも淫夢に屈伏するわ。やがては屈伏の悔しさを思いおこさなくとも済むよう、淫夢に依存し始める。依存の哀しさを忘れられるよう、ついには隷属の坂を下り始める……うふふ、エフィだってもうすぐよ。一回精をやるたびに、二度と引きかえせぬ夢に沈んでいるのだからね」

ヌメヌメとした手が、脂肪多めで弾力性よりも柔軟性の方に凱歌のあがる双乳を揉みまわす。血管だらけの蛇が、痲りきった乳首を吸いたてる。

「そして千世紀に一人の聖女様が、哀れな牝に生まれかわるの……淫らなことしか考えられない、肉欲の虜に墮ちるのよ」

紫色した腕と蛇が、むっちりとした内腿を舐りまわし、足の付け根をなぞりまわす。割れ目を擦りあげ、恥叢をかき鳴らす。尻たぶをギユムギユムと捏ねあげ、ふくらはぎを揺すりたて、足の指を一本残らずしゃぶりつくす。女体のありとあらゆる部位を、あますところなく愛撫する。

「……ひあつ、あつ、く……く……く……ル、ルーティンライド……か、可愛そうな人……」

意表をついた反応に、黒衣の責め手は瑠璃色の瞳を硬直させた。手を振って生きた壁を黙らせ、わなないている尼僧を睨みつける。

「何か言った、エフィ？　とても面白い台詞を聞いたような気がするのだけけど？」

「……た、他人の光を……う、奪わなければ……あなたは、自分が……か、輝けないと思
っているのですか？」

「……お喋りが過ぎるわよ、エフィ」

ルーティエは飄々とした雰囲気をかなぐり捨て、吼える狼になった。下唇を貫通してしま
いそうな犬歯を煌めかせて、エフィの前髪をわしづかむ。

「目の前で痴態の限りを尽くしてみせたくせに、その私に向かってお説教？　さすがは神
の相談役だわ、片腹痛くて涙が出るわ！」

尼僧の苦しげな顔に唾を吐き、左手を壁に突きさした。壁に闇色の波が走り、無数の人
間が舌なめずりしているような音を立てて変形し始めた。

「思いださせてあげる」

肉壁が盛り上がり、台のように迫りだしてくる。女司祭は真っ赤に染まったままの腰を
持ちあげられ、胎児のように丸められた。肘と膝がくつつくまで足を引きあげられて、顎
のしたにぐしよ濡れの秘所を突きつけられる。下半身の手入れすら禁じられている聖職者
らしく、エフィの恥叢も密に茂っていた。

「あなたがいったい何にすぎないのか、心の底から思いださせてあげるわ……どこよりも大好きなところに、何よりも大好きなものを挿してね」

爪先が、両踵が、引屈ひざのうらが逆上がりさせられる。むっちりとした足に続いて、完熟を感じさせる尻が逆さにされた。紫光を浴びて照りかがやく尻たぶには、異様な烙印おんいんが穿たれていた。

鏡合わせの螺旋に、それぞれ三本ずつの枝と四つの点。破戒せる情欲の象徴——羽根つきはねつきの竜を向かいあわせにしたような、実に禍々しい凶形だった。

「……ひ……や、やめなさいっ、ルーティエ！」

胴の底を頭より高くされて、エフィの美声に切迫感が兆した。略称で呼ばれた女は一切答えず、ひっくり返された烙印を、ゆっくりと撫であげる。左右対称の螺旋に、黒い揺らぎが浮かんだ。

「ル、ルーティエ……ッ！ あ……ひあ、んああ……」

エフィの尻尾が、一気に溶けくずれた。はつきりとしていた声から母音の確かさが抜けおち、尻たぶが粘つくく痙攣けいれんし始める。

「……だめ……ひあっ、や、やめて……ルーティエ、おねがいだから、それだけは……」

「あら、それって何かしら？」

ルーティエは壁から手を離し、その掌に自分の尻尾を乗せた。槍のように尖った先を、

同じく尖った舌で舐めまわし、唾液をたっぷりと塗りつけた。

「……それは……だから……あ、あなたが……しようとしていること……んあっ！」

逆手にかまえた尻尾の先を、ルーティエは尻の谷間に押しあてた。

「エフィ……そんな宗教的な物言いで、神に見放されている私には分からないわよ。分からないのだから、やめようもないわ」

人を突きさすために造られたと思しいそれを、眼前の恥部に密着させる。かすかに色素を沈ませた皺だらけの穴が、手振りしているかのように蠢いた。

「ひあっ！ だ、だから……お尻を……」

「お尻？ お尻に触らなければいいのね？」

「……おっ、お尻の……あ……あ……あ、穴を……」

答えているあいだにも、エフィの呂律が怪しくなっていく。美貌が茹でられたみたいに変わり、尻から腰にかけての震えが激しくなる。

「……お尻の穴を……いっ、いじめないでっ！」

「苛めるですって？ エフィ、とても心外だわ。今まで私が、あなたの好物を苛めたことがあった？ 痛めつけたり、不快な施しをした例ためしがあった？」

ルーティエは尻尾の切っ先で、肛門の皺を一本一本、数えるように梳き始めた。それまでの態度からは想像もできぬ悲鳴を漏らして、エフィが尻穴をすぼめ、腰を踊らせる。

「あつ、ひあつ！ だつ、だめつ！ そつ、そこ！ そこには……」

一拍の躊躇いを挟んで、

「……お尻の穴には、悪魔がいるのっ！」

「知っているわ。だから追いだしてあげるのよ」

冷たく笑い、尻尾を一息に突きさした。よほどこなれているらしく、エフィの尻蓄は柔らかにほころんで、背徳の罪をあつきりと受けいれていた。

「ひーっ！」

祈祷を唱える者にはふさわしからざる、獣じみた絶叫だった。聖母に愛された娘は、立て続けに喉を嚔らし、瞳を白黒させて痴態をさらした。

「ひいっつ！ ひーっ！ お尻っ！ んうっ、お尻だめなのっ！ 悪魔が、悪魔が起きちゃうっ！ 悪魔につ！ んーっ！ お、おかしくされちゃう！」

ルーティエは左手で尻尾を抜きさししながら、右手でエフィの頬を包みこんだ。親指の腹で、唾液だらけの朱唇を何度も撫でまわして、

「エフィ、だめではないわよ」

優しい口調に、冷たい表情。まさに御為おためごかしそのものの態度だった。

「だめではない……悪魔に憑かれようがおかしくなるうが、ちっともかまわないのよ」
「むっ、んむーっ！ そんな、そんな奥う！」

「破戒せる情欲が孵化してから、ここはそういう場所に変わつたの」

「あむっ、んーっ、深いっ！ 深いのっ、深すぎるのおっ！」

「人の喜びのために生きてきた聖女が、自分の喜びのために生きること……その身の快樂のためだけに生きることを、許された地になつたのよ」

ルーティエの手つきに、上下左右の動きが加えられた。直腸の急所を的確にえぐられて、エフィの喘ぎが凄絶さをいや増す。団子虫の女体を跳ねらせ、顔色を激変させ続ける乱れぶりは、聖女と呼ばれていた過去が疑わしくなるほどだった。

「……そんなっ、んむっ、そんなのっ！ ……んあ、ひあっ、あむう……んーっ！」

「だって、そうでないとおかしいでしょう？ あなた方だけが苦労して、こんなにすてきな悦びを堪能できないなんて……そんなの不公平でしょう？」

ルーティエの右手が頬を伝い、艶めかしく滑りおりて鎖骨をさする。やや開き気味の右乳を持ちあげ、その頂きで破裂しそうな肉芽を手折る。

「エフィ、あなたはいつでも教えてくれたわよね？ 神様は公平、どんな者であつても分けへだてはしないって……禍福はすべて、神の調和のもとにあるって」

尻尾の挿入が勢いと速さを増し、腸粘膜のすき間から生温かい粘液を噴きださせた。汁の分泌ぐあいや粘膜たちの心得た動きが、徹底的に仕込まれた穴であることを雄弁に物語っていた。

「そう言って聖書を読んできたでしょう？ だからね、エフィが尼僧として励んできた分だけ……厳しく貞潔を守ってきた分だけ、悦んでもいいのよ」

「ひああ……いい……いい？」

「ええ、いいわ」

ルーティエは、とても優しく微笑んでみせた。

「わ、わたしい……いいの？　せ、聖職なのにつ、よ、よろこ……ひーっ！」

「いいのよ、エフィ。誰にも何にも憚ることなんてないわ」

心の中身を吐きださせようという意図に合わせて、ルーティエが引きぬきに重心を置いた責めをくり出してくる。

「さあ、声を出して……今の気持ちを叫んで」

出口付近で微妙に尻尾を傾けて、腸壁を甘痒く擦りたてる。外に出す寸前にいやらしい小休止を入れて、肛蕾を捲りあげたままに仕置き、生々しい赤みのかすかな震えを尻ゼン太いに伝えさせる。

「……き……きつ、気持ち……いい……」

「ほら、もっと大きな声で」

「いいっ！　ひいっ、きつ、気持ちいいのおっ！」

「どこが、どうして気持ちいいの？」

「お尻っ、お尻が気持ちいいのっ！ 悪魔にっ！ 悪魔に憑かれちゃったからっ！ お尻がっ、悪魔でっ、おっ、おかしくなっているのおっ！」

引きぬきに合わせて、尻たぶがピクピクと痙攣する。汗を噴きだした肌は、粘液のせいもあって膜でも貼られているかのように光り、その艶味ある曲線をよりいっそう際だたせている。

「エフィのいやらしいお尻は、すぐ悪魔に憑かれてしまうものね……聖女様の持ち物ではないものね？」

「んーっ、んーっ！ そっ、そうなのっ！ お、お尻っ！ エフィのお尻は、つつ、罪深いのおっ！」

「ほら、もうすぐよ。悪魔がエフィのなかから……姦淫の印を焼きつけられたお尻から出ていくわ。さよならのときに何て言えばいいのか、どう言えばもっと気持ちよくなれるのか……分かるわよね？」

信者を導いていたとは思えぬ顔で、エフィはコクコクと頷き続ける。すでに意識が濁っているらしく、瑪瑙には何の輝きもない。尻の穴からほとばしってくるけたたましい快感に、髪の毛まで支配されている。

「わかるっ！ エフィ、わか……んーっ！」

「なら言いなさい。頭が割れるくらいの大声で叫びなさい！」



ルーティエが、渾身の力を込めて尻尾を挿した。内臓を根こそぎ押しあげ、裏側から子宮を蹴りつけた。とどめの一撃に、女司祭の軀が硬直した。

「んむっ、むっ……ック！」

短い絶叫が続いて、性の反応でしかありえない狂乱が、ひきもきらずに走りぬける。大粒の汗が飛びちり、溶かしこまれていた匂いが肉の本性を打ちあけた。いくら聖女と讃えられても、結局は牝にすぎないことを非情にもひけらかしていた。

「イクッ！ エファイっ、イクウッ！」

女体の蠕動が終わるやいなや、ルーティエは尻尾を抜きとり、まだ鎮まりきっていないエファイを睨みつけた。唾液まみれの頤をつかみ、その首を傾けさせて、

「エファイ、信仰があるのかなのだったけ？ 神様の光がどうしてくれるのだったけ？」

「……うむ……む、むあ……ああ……」

大罪を楽しんだ聖女は、痛切な悔悟の念に襲われつつ、同時にいまだ醒めやらぬ悦びにも痺れさせられ、相反する情感に揉まれて慟哭した。

「あら、悔しいの？ それとも嬉しいのかしら？」

「……ああ……ルーティエ、あなた……あなたは、どうして……なぜ、ここまで……」

肉の悦びに負け、命ぜられるままに恥をさらし、あまつさえ破戒せる情欲の許に魂を翔ばしてしまった。聖職者として絶対に許されぬ墮落を、女として最高の悦びを味わいなが

ら受け入れてしまったのだ。

「エフィは、そんなこと気にしなくてもいいのよ」

ルーティエが再び、肉の壁に手を振りかざす。

「あなたは黙って、淫夢に溺れていればいいの。安心して、あの娘の話だと、ノインもそろそろ躰が終わるそうだから……ふふっ、二人そろって悪魔の、自ら倒そうとした淫魔の婢はしなめにしてあげる」

それまで控えていた無数の腕と蛇が、嘔むせび泣くエフィに躍りかかってくる。たちまちのうちに肛門が塞がれ、聖母の門が破られた。双乳がわしづかみにされ、乳首が力強い音をあげて吸いたてられた。

「……んあっ、あひいっ！ だめっ、だめだめだめえッ！」

アーガスの聖女、聖母の愛娘、聖なる百合ユツアンゼルの守護天使。かつてそう呼ばれていた日々が夢だったのではないか、と思えてくる。何度も何度もこの軀を突きぬけていく衝撃こそ、何よりも確実で、絶対に否定できない現うつではないか——。

※

「……あちらは、もう調教が終わったみたいね」

室内の反対側に陣取っている一組を見やりながら、ルーティエはぼつりと呟いた。

もちろん、エフィの答えを期待してのものではなく、呼びかけの体裁を取った独り言に

すぎなかった。そもそもエフィの方も、とても応じられる状態ではなかった。

「……んむっ、むう！ んむーっ！ むうううっ！」

ルーティエの尻尾で尻穴を貫かれてから、いったい何度、肉の夢を散らしたのだろう？ 女司祭は逆さまに吊りあげられ、初めて肛蕾を破られたときと同じ姿勢に固められていた。脇腹や下肢を折りたたまれ、股をあられもなく割りひらかれ、無数の肉縄に巻きつかれて、女体の丸みをやりすぎなくらい際だたせられていた。

「んーっ！ ……うふ、ふぐうっ！ ぐむーっ！」

淫猥な逆三角形と化した女体に、執念を漲らせた男根や触手が群がっている。天を向いた秘唇と肛蕾には、野太い逸物が杭打ちの要領で打ちおろされ、不自然な体勢のため涎を垂らしてしまう口唇には、螺旋状の男根が串刺しの突貫をくり返している。

——ズプッ、ズチュッ、グチュッ……ドプッ！

今日だけで数十回になる射精を受けて、エフィの上下が白く汚された。口唇のモノは引きさがったが、秘唇のそれは間髪入れずに交代して、粘膜どうしで慰めあうことすら許さなかった。鍛冶場の作業を思わせるたくましい突き込みが、聞くにたえぬ粘音を響かせる。聖母の門と排泄の穴が、入れちがいに破壊の手前まで運ばれる。

あいだに挟まれている肉壁が、太鼓の皮よろしく前後に伸び縮みさせられた。聖母の愛娘は白濁混じりの涎を吐きながら、瞬きの間隔で翔ばされ続ける。

……それらがドロリと溶けくずれ、魂の羽根に変わったでしょう？」

反駁しようとしたが、適当な文句が思いつかばなかった。軀の奥深くを走りぬけた衝撃が、いまだに脳を痺れさせているのだ。

あれが、絶頂——。

聖教では神を見失うとされる、あるいは、悪魔憑きの変奏とされる忌まわしき時間。

(……あれが……あの……すごいのが……)

「罪深い」や「汚らわしい」といった、騎士団員が懐くべき感想は浮かんでこなかった。アリスは言葉の乏しい子供が花火を見たときみたいに、胸の奥でひたすら「すごい」を輪唱していた。

「いいですね、その顔……悦んでしまえる自分、女としての自分を知って、戸惑いと喜びのあいだで揺れている……」

凶星を突かれて、アリスの唇が不自然に捻れる。きれいな歯並びがほの見える、月明かりを跳ねかえした。真っ赤な目尻が、急角度で吊りあがる。

「おやおや、そんな恐い顔をなされても……」

偽りの聖職者は、女騎士の視線を受けながし、その股間に目を向けてきた。垂裳を捲りあげられ、あられもなく開かれたそこには、生まれて初めて聖鏡の曇りが現れていた。

「……そちらで涙されているとあっては、聖職者として見捨ててはおけません。胸だけで

はなくそこにも、いえ、そちらにこそ、夜の祝福を授けなくてはなりませんからね」

銀色の草摺と紫色の長靴下に囲まれて、薄桃色の肌が見えている。足の付け根、下腹と腿と尻が集って描きだした複雑な曲線は、汗にしては粘っこい露にまみれて、うっすらと光っていた。

「……………」

さらに足の切れこみが描くV字、女にしか描けない丸みを帯びた造形の中央には、聖別された股布が走っている。恥丘をギョッと引きしぼっている秘密の底、決して露わにしてはならぬ食いこみが、やりすぎなくらいに浮きだしている。

「……ああっ、み、見るなあっ！」

アリスは慌てて足を閉ざし、内腿どうしを密着させた。肌と肌が触れあったときにニチャッ、と淫猥な音がして、耳まで真っ赤にさせられてしまう。

「ふふっ、隠したところでムダですよ……そうですね、オットー殿？」

聖職者の声に応じたのは、その隣に立っている元騎士だった。

「……そ、そうだなア」

いや、元「騎士」というより元「人」と言った方が適切だろう。魔族に変わりはてた彼の姿は、もはや神の似姿としての体裁すら失っていた。

一言で表せば、オットーは異様に細長い犬だった。槍のように尖った鼻をクンクンと鳴

らして、騎士だった魔族は長剣ほどもありそうな口を開いた。

『こ、これだけイイ匂い……させといてエ……隠すも何もねエ……』

途端にゲッゲッゲッ、と笑いが湧きおこる。耳の奥を掻き搔るような奇声の源——自分をとり囲んでいる魔族たちのありさまを、アリスは改めて観察した。

「……お、オットーさん……みなさん……」

腐りかけの肉じみた色、鼻を殴りつけてくるような臭気、離れていても伝わってくる表皮のヌメリ。女騎士を囲んでいるのは、地獄から抜けだしてきた亡者たちだった。

巨大な顔から直接手足を生やしている化け物がある。太りすぎの蛞蝓なめくじじみた肉塊が、魚の鱗ひれじみた器官を石畳に叩きつけている。蓮の実みたいに目玉だらけの蝸牛が、コロコロと転がっている。肉の粘土で捏ねあげられた巨大な蜘蛛が、でっぷりとした腹をフルフルと揺すっている。闇色の水溜まりめいた液塊から、瘤だらけの顔や手が飛びだしている。

どれも人とは思えない容姿をしているのに、軀のどこかに人の顔じみたモノがついている。気まぐれに残された人の面影が、かえって不気味さを煽っている。

——ゲヒヤ、ヒヤヒヤヒヤ。

「……………み、みな……………さ……………ん……………」

——ギャハッ、ギャヒ、ギャハハハハ……。

「恐がることはありません」

姦淫聖職者が両手を頭の高さに掲げる。何かを支えているような格好のまま、呪文らしきものを唱える。

「彼らは皆、一足先に夜の真実を知った覚者……アリスフェルト殿の導き手なのです」
邪なる羊飼いに操られた家畜たちが、毛虫の歩みで迫り始める。

「……く……くるな……くる……なあ……」

アリスは横座りになり、自らの身を守るように抱きしめた。四方のすべてを囲まれている以上、どこにも逃げ場はなかった。

——ヒヒッ、ヒヒヒッ……女ア……女だア。

——オンナ……イイ匂いにするオンナア……。

——オレの……オレの悪夢を……か、叶えル……。

獣臭のする乱杭菌らんくいばが、ゆらゆらと近づいてくる。どう見ても男根にしか見えない舌が、その切っ先を回転させている。蝦蟇がまぐち口じみた触手の裂け目が、松脂状の涎をしとどに垂らしている。

「……くる……な……ああ、こ、こないで……」

頬が不自然に伸びてしまう。飲みくだした唾があまりにも酸っぱく感じられて、嘔吐してしまいそうになる。

——いい……いい女だア……しかも、処女……。

——オレ……オレが貰う……聖なる鏡を……割ル……。

——ヒヒヒ……齧ってヤル……し、処女膜を鼠のように……チビチビと……ヒヒヒッ、喰らってヤルウ。処女の血の味ィ……ヒヒッ、ヒヒヒ……。

腕らしきものが伸びてくる。毛むくじゃらの、疣や瘤だらけの、血管と思しき筋だらけの肉筒が、四方八方から伸びてくる。

「……こ……こ、こないでえっ！」

胸元からせりあがってきた恐怖に蹴りだされて、常のアリスらしからぬ金切り声が漏れた。それが合図だったかのように、淫夢の虜たちが襲いかかってきた。

「いやあああっ！」

巨猿じみた手が、銀色の肩当を毫りとった。肉の瘤をくつつけた葡萄のような舌が、百合紋付きの胸当を剥ぎとった。目のない大蛇が、草摺を噛みくだいた。白き女帝より下賜された鎧が、聖なる第二の肌があっけなく壊された。腕と脚以外の武装を剥がされ、下に着ていた衣服までも引きちぎられる。神の加護を受けていたはずの布が舞い、汗にまみれた肌が露わにされた。

ほぼ丸裸に剥かれてしまった女騎士は、次に手足をむんずと捕まえられて、天高く放りあげられた。二階の窓に達するまで翔ばされ、加えられた力のままに宙返りを強いられる。髪結いの紐が切れて、馬の尾に括られていた黒髪が艶やかに広がった。月明かりに輝く

蝶のような姿が落下し、いつのまにか絨毯よろしく敷きつめられていた肉の群れに抱きとめられる。赤紫色の、疣や筋だらけの、獣臭い異形の器官——無数の腕や舌や触手が、先を争って群がってくる。

——ヒヒ……ヒヒ……ヒヒヒッ！

髪をつかまれ、後ろに引っぱられた。ガクリと折れた首に、育ちすぎの芋虫じみた舌が巻きついてくる。

「……うあつ、き、気持ちわる……んむっ！」

芋虫が頬を撫でまわし、誰とも重ねたことのない唇に、荒々しく割りこんでくる。口蓋から歯の裏まで、穿りまわすみたいに舐ってくる。

「むっ！ んむう、むっ！」

いきなり顔を穢され、しかも口まで犯されてしまったのが効いた。実際に軀のなかに潜られて、魔性の味と温もりを頬張らされてしまったのは、どんな強がりも無力さの現れでしかなかった。さらに四肢をつかまれ、あるいは括られて、四方に思いきり引っぱられる。背中がネットの寝台に埋められる。

アリスの支柱である負けん気に、儂い音を立ててヒビが走った。瞳の焦点が奥に引っこみ、瞳そのものがあらぬ方向に流れかける。

——オ、オレたちも……オレたちもオ……。

手の代わりに蝟の足をつけている奇怪な腕が、張りつめている双乳を握りしめてきた。「むーっ！」

骨のない八本足が、まだるっこしい動きで食いこんでくる。疎らに散らばっている吸盤が、痕を残しそうな接吻を見舞ってくる。いち早く「祝福」を授けられ、テラテラとヌメ光っていた双娘はひとたまりもなく懐柔されて、魔の悦びをほとばしらせてきた。アリスの背筋が不器用にたわみ、眉根がだらりと垂れさがる。ほつれ毛が頬に貼りつき、被虐的な彩りをひけらかす。

「ああ、よい揺らぎぶりですね。あの口先だけの女司祭とは違って、聖鏡殿が改宗なされた暁には……」

姦淫聖職者が、チラリと背後を振りかえった。にやけた視線の先では、ヒルデガルデと元城主ガイエスバハが剥きだしの獣欲をぶつけあっている。

——溶けるうッ！ ひいつ、ヒルダっ！ ヒルダ、溶けちやうっ！

——ははは、溶ける溶ける！ ただの肉泥になつてしまえッ！

異形の化け物が、喉までぶち抜こうとしているような突きこみを、休みなくくり返している。墮ちた聖女もそれに応えて、吊りさげられた裸身を踊らせ続けている——。

「……さぞや美しき夢を捧げられるのでしょうかねえ」

悪魔の声にけしかけられて、異形たちの動きが活発化する。手代わりの魔蝟たちがヌル

ヌルと移動し、小躍りしているような乳首まで呑みこもうとしてきた。別の触手、植物の蔦じみたモノがやってきて、薄桃色の芽を獲えようと小競りあいを始める。やがて蔦が蛸を押しつけ、肉の芽を我がものにしてしまう。

勝った触手の尖端は繊毛に覆われていて、薊あざみの花みただった。粘液にまみれてしつとりと濡れた毛束が、汗や汁にまみれた突起を執拗に磨いてくる。

「んむっ、むっ！」

毛のような舌のような、掃くような舐るような、けたたましくも粘着質な摩擦感に、乳首が痙攣しだす。魔蛸たちも横取りされた鬱憤を晴らさんと、膨らみを執拗に揉みこんでくる。元々の半球型が、面白いように造りかえられてしまう。

（ああっ、また胸えっ！）

アリスは目のしたを紅蓮に染めあげ、唇の端から涎を垂らした。

（またっ！ ああっ、また、おかしくされる……おかしくなっちゃう！）

乳首が、双乳が、甘くざわめいてたまらない。鍛えてきた軀も、尖らせてきた心も、この獐猛な気持ちよさの前では生まれたての子猫だった。知らぬ間に芯から飼いならされて、紫肉の絨毯のうえをのたくり回らされる。

「では、粛々と儀を続けましょうか」

ヒルデガルドを虜にしたときと同様に、姦淫聖職者が糸目を見開いた。黒目だけの球が



ボトリと落ちて、夜明けなき闇を漏らします。あらゆる光を呑みこむそれが血涙よろしく滴りおち、やがて眼窩から脳みそが流れだしてきたかのごとき泥濘状になった。

——ヒヤヒヤヒヤ……わ、我らの悪夢ウ……。

肉具たちは暗黒の蜜泥をすくい取り、自ら分泌させている粘液と混ぜあわせて、肉の下ごしらえよろしくアリスの雪肌にまぶし始めた。五本指をそれぞれ真つ二つに裂いて十本にしたような奇手が、闇をつかんで背に擦りつける。あちこちに歯を埋めこんでいる舌が、少年の面影を残す美尻を黒く染める。無数の疣を生やした触手が、脇腹や足の付け根をヌルヌルの煤にまみれさせる。

「んむっ、む……つぶは！　うわああっ！」

女騎士は死に物狂いで首を振り、異形の舌を吐きだした。奇妙なことに、吐きだす瞬間がいちばん、味を意識させられた。荒い息を整えもせず、絶叫を放つ。

「や、やめてえ！　ああっ、塗らないでっ！」

ヒルダの陥落を見せられ、自らの胸でも思いしらされた。この闇を塗られた場所は、そのまま墮落の受けいれ口と化してしまうのだ。そこからどす黒い衝撃が生まれ、投石機トビシキのように脳天を撃ちぬいてくる。そのとき背骨を上下する稲妻。險の裏に瞬く光。闇と光の交錯後に訪れる、どこまでも沈んでいくかのごとき安楽感——。

恐ろしい。

この闇が、姦淫聖職者の「教義」が恐ろしい。そして何よりも、自分の軀のなかで目覚めてしまった悪魔が恐ろしい。そいつは、まちがいに脈動し始めている。舌なめずりの音を立てている。

女騎士の悲鳴を無視して、塗りつけられた闇が肌の内側へと浸透する。蒸気音を立てながら潜りこみ、禁欲暮らしで干涸びていた悪魔の養分になる。女体の底に宿る罪が、蜜を吸う蝶のように吸引管を伸ばし始める。膣道が奥へ、先へと伸びていく。

「いやああ……っあ！ うあ……あ、ああ……」

闇を吸った肌は艶を増し、茹でられたように朱を差した。すべての毛穴が開き、汗とともに甘酸っぱい匂いをくゆらせた。

——ヒヒ……は、始まる……孵化が……始まる……。

——と、閉じこめていた「女」が……ケケケ、う、生まれるゼエ！

擦りこみ作業に没頭していた魔族たちが、再び凌辱に勤しみ始めた。手始めに、異形の舌が腰骨から腋窩、胴の側面をぬるりと舐めあげてきた。

「……あーっ！」

アリスは、焼き鏝を押しつけられたように身をよじらせた。一瞬のうちに全身が鳥肌立ち、少年っぽい肩と娘らしい腰を上下動させられてしまう。

「ああっ、あああ、ああ……」

魂を抜かれた亡者の態で、熱くて重い吐息をこぼした。闇によって肉を淫らに染めあげられたからだろう、ゾクゾクとした狂乱が止まらない。内臓までもが揺すぶられ、どうしても黙ってられない。

——い、イイ声エ……ああ、夢の声エ……。

異形の舌に続いて、腐肉の指。押しつけがましい触感に、尾骶骨からうなじまで撫であげられた。流れおちる玉の汗をすくい取られた。

「うああっ、ああっ！」

瞬時にして肌と肉の境目が粟立ち、その内側を攪拌しながら芯まで潜りこんでくる。肉や骨や臓をバラバラにされてしまったような錯雑感、軀と魂を引きはがされていくがごとき不安感。それらが、灼熱の眩暈とともに訪れる。頭と腰が割れそうに疼きだす。

「どうやら、お軀の方は……私たちの教えに改宗なさったようですね」

尖端に眼球をつけた触手が、内腿を撫でまわしてくる。水かきのついた手が尻たぶをつかんでくる。細い舌を繕りあわせたような肉筒が、脇を穿ってくる。まるで巨大な口のかでしゃぶりまわされているみたいだった。

「あーっ、あーっ！ あああーっ！」

刺激の量自体が膨大で、そのうえ質としてもいやらしい丸みを帯びていてとっかかりがないので、まったくもって抗いにくい。どうすればよいのかわからぬうちに肌が溶け、肉

が蕩け、心が蝕まれていく。酔につけられる鯁にしんの気分を追体験させられる。

——ズルリ、ヌロオ……グニユッ、ペロリ……。

責めの手が、舌が、触手が増えていく。首筋が、鎖骨のくぼみが、肋あばらの線が、足の付け根が、内腿のふくよかさが犯される。聞くにたえぬ粘音が、切れ目なく連続し始める。

やがて「オットー」と呼ばれていた犬が、その口吻をおののく股間に差しこんできた。槍じみた鼻先で、股布のうえから秘裂を掻きわけ、ちょうど紋章のなかほどに浮きでた瘤りを突きあげてきた。

「……………ッ！」

蹴りあげられたみたいに腰が跳ねた。鉄靴シユウのなかで、足の指が音を立てて丸められていた。狂おしすぎる一拍を挟んで、下半身の緊張が軀の芯を駆けのぼってくる。頭のなかで卵白状の濁流に揺さぶられる。

「あ……あ、ああ……」

急激な上昇感と、その後に訪れる底知れぬ崩落感。軀の内側で起きている激動をほのめかすように、手足に痙攣が走る。わななく腰から、骨格そのものが抜きとられた。

「おや、また達されたようですね？」

「……………ちがう！」

「ふふふ、そうですね……確かに、まだ本式ではありませんでしたね」

姦淫聖職者の糸目が、睫毛だけの線になった。

「おっしゃる通り……破戒せる情欲様の御許に魂を翔ばすときには、必ず口にしなければならぬ聖句ヴェルムがありますからねえ。先にヒルデガルド殿の洗礼をご覧になっているのですから……ふふふ、おわかりですね？」

姦淫聖職者の目配せに気づいたらしく、オットーが再び、「そこ」を突きまわしてきた。
「……あーっ！」

あっけなく爆ぜてしまった。布一枚を扶んでの適度な穏やかさが、愛撫に馴れていないアリスにはちようどよい刺激になっていた。

「ああっ、だめえ！」

突起の横っ腹を押しあげられ、その頂きを股布に擦りあげられるたびに、女体が縮まっ
ていく気がする。縮んでしまった分だけ、突起の先から何かがビュッ、と飛びだしていく
ように思えてくる。ひよっとして、本当に魂を削りとられているのだろうか？ だから、
こんなにも狂おしいのだろうか。

「そ、そこだめっ！ やあっ！ やだあっ！」

聖職者たちが「ここ」をどうして「罪の芽」と呼んでいたのか、いやと言うほど納得で
きてしまった。アリスはあられもなく腰を掲げ、見ようによっては捧げ物と為しているか
のような痴態のまま、熱に潤んだ叫びを吐きだし続けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>